

庄野英二全集

7

偕成社

庄野英二全集 第七卷

印刷 昭和五十四年七月二十五日

発行 昭和五十四年八月十日

著者 庄野英二 しょうの えいじ

発行者 今村 廣

発行所 株式会社 偕成社

〒一六二 振替 東京五一―一三五二番
東京都新宿区市ケ谷砂土原町三の五

電話 東京(〇三)二六〇一三三二(代)

印刷 新興印刷製本株式会社

製本 文勇堂製本工業株式会社

定価 二五〇〇円

乱丁本・落丁本はおとりかえいたします。

庄野英二全集 第七卷

装
幀
協
力

装
幀
カ
ッ
ト

山
高
登

庄
野
英
二

目 次

木曜島

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
映画	エビ	船上作業	初航海	コック	ガヴァーメント	ボーレンハウス	マニラ	フサちゃん	バナナ	真珠貝採取人傭入契約書	手帳	出発
64	60	56	52	46	43	37	33	30	28	24	16	11

29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
手紙―その四	日記―その一	デアッブ	殺人事件	手紙―その三	甲子郎 こうしろう と益治 ますじ の手紙	手紙―その二	朝の潮	ドゴン	ゴイチ倒 だお し	ウミガメ	サンペチ	英語・数 かず え唄 うた	手紙―その一	ダイバー病	父の消息 しやうそく

150	137	132	126	122	118	108	105	98	91	86	81	79	75	71	67
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30
聞いた話―その二	聞いた話―その一	狩 しゅ 獵 りよう	紅 べに ミカン	大しけ	ソロモン	海鳥	ナマコ	酒	ケリース号	マラカム	フレンジスアイラン	金太郎	ピストル	手紙―その五	日記―その二

226	225	219	217	213	204	201	197	189	184	182	174	169	167	163	153
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46
開 戦	雑 ^{さい} 賀 ^か 船長にきた手紙	鹿 ^か 島 ^{しま} 丸 ^{まる}	手紙―その十	田島芝一氏	中 国 人	軍 事 探 偵 ^{たんてい}	手紙―その九	ハナエとユキエ	ダンスパーティー	手紙―その八	マレーアイラン	虹 ^{にじ}	手紙―その七	ヴロンフィールド	手紙―その六

284	278	276	274	271	269	264	262	260	257	254	248	245	241	230	228
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

絵具の空……………293

チラチャップの鳩笛 はとぶえ

295

武田麟太郎 たけだりんたろう

347

花更紗 はなさらさ

389

あとがき……………446

庄野英二全集 第七卷 解題……………448

庄野英二 覚え書……………452

戸塚 惠三……………

前川 康男……………

木^{もく}

曜^{よう}

島^{とう}



1 出 発

木曜島行きのため十六歳の朱見佐太郎が、郷里串本を離れたのは、昭和十三年二月十三日夜九時であつた。

南紀からの同行者は計十六名で、串本からの乗船者は佐太郎と隣家の竹本長治のほか数名であつた。佐太郎を見送るために串本小学校の若い中井清子先生も棧橋にきてくれていた。

見送り人たちは、口ぐちに、「氣いつけやんしよう、氣いつけやんしよう」といっては握手をしてくれたが、佐太郎は握手というものをするのははじめてのことであつた。中井清子先生も佐太郎の手を強く握つてジャンケンをするように、大きく二、三回上下に振つた。

棧橋から、はしけに乗り、沖にかかっている大阪―勝浦定期急行船那智丸に移乗するのであつた。

はしけが棧橋を離れるとすぐに、見送り人は暗闇のなかに見えなくなつてしまつた。

那智丸についてタラップをのぼり、三等船室にはいつていくとペンキの匂いが鼻をついた。船室にはみどり色のじゆうたんがしきつめられてあつた。佐太郎は、これでも三等かと驚かないではいられなかつた。こんな大きな船に乗るのをはじめてであれば、こんなきれいな部屋で寝るのをはじめてのことであつた。

このときになつてやっと、佐太郎は長いあいだの念願がかない、いまから外国へ旅だつていくのだ

という感慨をかみしめていた。

*

佐太郎は朱貝家の長男で、大正十一年三月の生まれであるが、そのころ父は、シビナワ船（マグロハエナワ）の船頭であった。神奈川県三浦三崎を基地に、秋から冬にかけては遠洋漁業に出かけていた。そのほかの期間は、串本で夜タキ網の仕事に従事していた。

佐太郎の下に、福江、松次郎、正彦、花枝、和美と五人の弟妹がつづいて出生した。

父は昭和六年、仲間と共同出資でシビの近海漁業をはじめたが、数年とたたないあいだに失敗してしまった。そのあとしまつに、屋敷五十坪と、ネヤ（納屋と寝所をかねた建物）を手ばなしたほかに多額の借金を残してしまった。借金は月掛で返済しなければならなかった。

佐太郎は昭和十一年三月、串本の尋常高等小学校を卒業したが、卒業前の二月一日より通学している串本小学校の小使になった。

前任者が海兵団へ入団したので、その後任として教頭から父に話があつて決められた。

佐太郎の家の家計を考慮しての厚意であつた。

佐太郎は、二月一日から学校の小使室に泊まりこみで勤務することになった。

朝、教員室の掃除をすませ、八時二十五分になると始業五分前の拍子木を叩き、三十分になると鐘を鳴らした。

その後は教室にはいり、一般生徒とおなじに勉強をした。それ以後の鐘は通勤の小母さんがいて鳴らしてくれた。放課後は教員室の雑用や掃除がおもな仕事であつたが、教員の私用に使われることが

多かつた。

俸給ほうきゅう月額十五円。それ以外に毎晩の宿直料十銭が支給された。

夜は宿直の教員に勉強を教えてもらうほか、碁ごや将棋しょうぎの手ほどきもしてもらった。日記を書く習慣がついたのも小使こづかいになつてからのことであつた。

二月二十六日、放課後ラジオを聞いていると、叛乱事件はんらんじけんのニュースがあつた。佐太郎さたろうは、これは大事件だと直感し、すぐに当直の先生に報告した。先生もすぐにニュースを聞き、要旨を黒板に記録した。当時の串本くしもとでは、ラジオは一部の家庭にしかなかった。

佐太郎は小学生の時分から、自分は学校を卒業すれば木曜島もくようとうへいくものと決めてかかつていた。南紀では木曜島のことを、タースデーと古くから呼んでいた。

串本あたりでは、身体からだが達者で野心に燃える若者たちはだれでもタースデーへいくのがならわしのようになつていた。

すくなくとも、「どこそこの息子さん」と呼ばれるような分限者ぶんげんしやの子どもはべつとして、ふつうに「うちのカキ」とか「あそこのカキ」と呼ばれているような一般はんぱの浜はまの子どもは学校を出てしばらくすると、タースデーか、それとも西豪州にしこうしゅうブルウムへ出かけていくのであつた。真珠貝採集業しんじゅがいさいしゅうぎょうの呼びよせ移民である。

次男三男は、海を渡つて荒稼あらかせぎをしてこないかぎり一生のあいだに自分の家を建てることなどほど困難なことであつた。

佐太郎の四人の伯父おじはタースデーにいき、そのうち二人はタースデーで死に、墓もあちらに建つて

いる。父の姉婿はタースデーで成功して帰ってきている。

佐太郎が小学校六年のとき、伯父の甲子郎と益治がつれだつて帰国し、一年たつとまた出かけていった。

佐太郎は甲子郎伯父、益治伯父に自分も高等科二年をおえたならば、ぜひタースデーへいきたいから補充のあるときには移民契約の手續きをしておいてほしいとたのんでおいた。両親はもちろん反対もしなかった。

呼びよせ移民は、ダイバーボートの乗組員に欠員が生じたとき、その欠員だけを補充するしくみになつていた。

昭和十二年八月になつて、伯父から移民の許可がおりた証明書を送つてきた。この証明書で旅券の申請をすることができるようになつていたが、旅券が下付されても、現地からの出国指令がなければ乗船することはできなかった。

八月末日をもつて、佐太郎は小使の辭職を申し出た。そして旅券の申請を代書人に依頼した。代書人は生命保険会社の外交員をもちかねていたので、いやおうなしに生命保険の契約もしなければならなくなつてしまつた。

タースデー行きが決定したということだけで、佐太郎は胸のうかが明るくなつたようであつた。

当時、タースデーでダイバーボートに乗り組むと、いちばん賃銀の安いコックでさえも、月五キンの収入が得られるのであつた。ポンドのことを邦人漁夫たちはキンと呼んでいた。当時の相場でポンドは邦貨十一円であつた。